

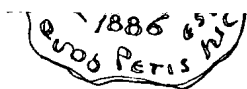
向陽著

奥アマゾン探検記(上)



中公新書

517



中公新書 517

向 一 陽 著
奥アマゾン探検記(上)

中央公論社刊

向 一 陽 (むこう・いちよう)

1935 (昭和10) 年、佐賀県唐津に生まれる。
1960 (昭和35) 年、東京外国語大学英米科
卒業。同大学山岳会員、日本山岳会員。現
在、共同通信社勤務。これまで、東京外語
大ポリビア・アンデス遠征隊長 (1964年)、
アタカマ高地探検隊長 (1970~71年)、奥
アマゾン探検隊長 (1973~76年)、南極点
(1965年、1968年)、北極 (1972年)、ニュ
ージーランド、アラスカなど、多数の海外
取材・調査歴をもつ。

著書『アタカマ高地探検記』(中公新書)

『奥アマゾン探検記』(下) (中公新書)

『アンデスを越えた日本人』(中公新書)

奥アマゾン探検記 (上)

中公新書 517

© 1978年

検印廃止

昭和53年9月25日初版

昭和56年9月30日6版

著 者 向 一 陽

発行者 高 梨 茂

本文印刷 三晃印刷
表紙印刷 トープロ
製 本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋2-8-7

振替東京2-84

定価 500円

まえがき

一九七三―七六年、私たち二十六人の日本人がチームをつくって南米のアマゾン川とこの北方に接するオリノコ川の上中流域を歩き回った。チームの名称は「奥アマゾン探検隊」である。

「アマゾン・オリノコ上中流域（奥アマゾン）」は、ベネズエラ、コロンビア、エクアドル、ペルー、ブラジル、ボリビアの六カ国にまたがっている。西方をアンデス山脈、東方をギアナ、ブラジル両楯状地に限られた、南北三千三百キロ（北緯一〇度―南緯二〇度）、東西千―千五百キロほどの間の堆積盆地で、ジャングル平原の恐ろしいほどの広がりの中に、両大河の大小の支流、枝川、三日月湖（古い川筋の残置湖）が絡み合うように入り組んでいる。地球の「緑と水の原点」であり、文明の進出に居住域を追われた南米の先住民インディオたちの「最後の聖域」である。いま地上で最も未知の陰影濃い場所である。

私たちは最初の年の一九七三年に、関連六カ国を回って予備調査をした。七四―七五年の二年間に、ベネズエラ領内のオリノコ河畔からボリビア南東部のサンタクルス市までこの地域を横断した。カヌーとゴムボートで多くの支流の上り下りを繰り返し、分水地帯のジャングル歩きを重ね、原始インディオの居住域を通り、北から南へ赤道を越えてジグザグに、切れ目のない一本の線を引いた。全行程は一万六千三百キロ（うち陸上部分は一千六百五十キロ）に達した。この小著は、

この「奥アマゾン横断」の記録である。

私たちの主目的は、右に述べたように、この未踏の香り豊かな土地に自分たちの足で一本の線を引くことであつた。山登りと同じ次元の冒険的行為、およびその記録である。十六世紀に始まつた文明進出以来これまで、アマゾンを北から南まで実際に「一つの目」で見た例はなかつた。アマゾンは広大さと外部からの侵入を阻むさまざまな障害に満ちているゆえに、もっぱら一攫千金や局部的な略奪開発の対象か、猟奇的レポートの題材としてしか取り上げられなかつた。

アマゾン（およびオリノコ）はこれまで、いわば人間の視野に入りきれない巨大な象であつた。アマゾンだけでも千本ほどの支流がある。その一本一本が長大であり、住人は各支流ごとに外見はそれぞれ独立したコミュニティをつくっている。事物の呼び名も、雨期・乾期といった自然条件でさえも支流ごとにまちまちである。一つのコミュニティの住人にとっては自分の川筋だけが「ここがアマゾン」であり、従つて外部の人間のレポートも、たとえばある川筋に入った人が「アマゾンは肥沃だ」と言うかと思えば隣の川に入った人は「アマゾンの土地はやせている」と反論するという具合に、とかく「群盲象をなでる」感じになりがちであつた。

このアマゾンに数年来、文明世界の行き詰まり打開のしわ寄せとして大規模開発という名の大波が押し寄せている。近い将来、「象」の全体像は永久に不明のままばらばらに壊されてしまふだろう。私たちは、私たちの冒険の付随的な結果としてこの「象の姿」をおぼろげながらにでも掴み、記録に残したいと願つた。民俗、地質、水質、植物、昆虫、気象、医療、熱帯農業などの

専門家、愛好家が横のつながりで隊に加わり、横断の過程で、また一時的に定着したりして、それぞれ分野を調査した。

この奥アマゾン探検隊の費用は主として南米に深い関連を持つフジタ工業株式会社と私の勤務先である共同通信社、および北海道新聞、東奥日報、福島民友新聞、静岡新聞、信濃毎日新聞、新潟日報、北国新聞、京都新聞、神戸新聞、山陽新聞、中国新聞、徳島新聞、愛媛新聞、高知新聞、四国新聞、宮崎日日新聞、計十六新聞社に面倒をみていただいた。また多くの方々のご厚意で隊が成立し、そして横断成功に漕ぎつけることができたが、とりわけ、藤田一暁氏、高杉幹夫氏、小川紘一氏、岡市脩氏、今西錦司氏、佐々学氏、寺田和夫氏、福田繁氏、村山雅美氏、笠木三郎氏、福島慎太郎氏、成田安賢氏、西井武好氏、有賀裕氏、加藤勝雄氏には、各面から暖かいご支援、ご指導にあずかった。この場を借りて心からお礼を申し上げます。

本書をまとめることができたのは中央公論社の宮一穂氏のご鞭撻によるものである。厚くお礼を申し述べる。

一九七八年八月

向 一 陽

目次

まえがき

I オリノコ川

南十字星の下へ イグアナの土地 地表最古の陸塊
国境の村 大ナマズ マラリア ピアロア族 太古
の岩絵

3

II ワイカ族の世界

アルト・オリノコへ 文明最奥の町 単調な大スケール
天然の大運河 アマゾンに緑は戻らない インディオ観
光化 裸の世界 豪雨の土地 シャブノ 自然食
弓矢 外来者に無関心 呪医 幻覚の世界を見る
幻覚剤の作り方 淡々とした世界 ワイカとの旅

43

Ⅰ 分水地帯横断

裏口からコロンビアへ グアビアレ川 コーヒーの国
ガソリンが切れた 三つのルート ジャングルの底の道
陸の孤島の町 マラリア患者続出 アリやハチが降る
アマゾン最大の滝 激流地帯を下る サルが食糧

Ⅳ 赤道直下

男ならやってみよう 大酋長 酋長のマロカ 長い溜
息の川 ジャングル渡りの道 連続する滝下り タイ
バノ族 バラサナ族 精霊の笛 満月の夜の祭り
ペドレラ村到着 無人境の岩壁画 カヌー造り バク
を食う サバンナの広がり 文明圏へ

Ⅴ ペルー領へ

ペルーの日本人 原始の中个村 昆虫地獄 最後の横

断へ 原始と文明

水軍基地に泊まる

炎暑の底の村

ジャングルの奥の村

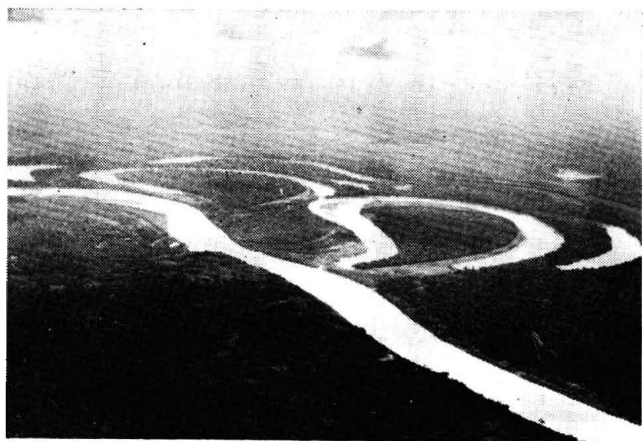
前期横断成功

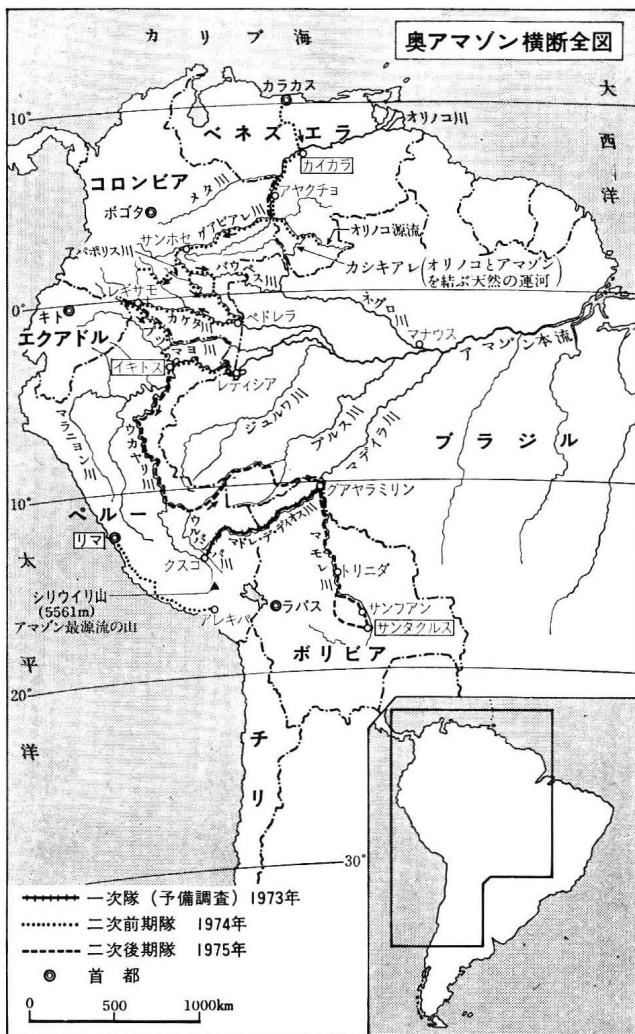
注 268

隊員名簿

273

奥アマゾン探検記（上）





I オリノコ川



オリノコ川に乗り出す。

南十字星の下へ

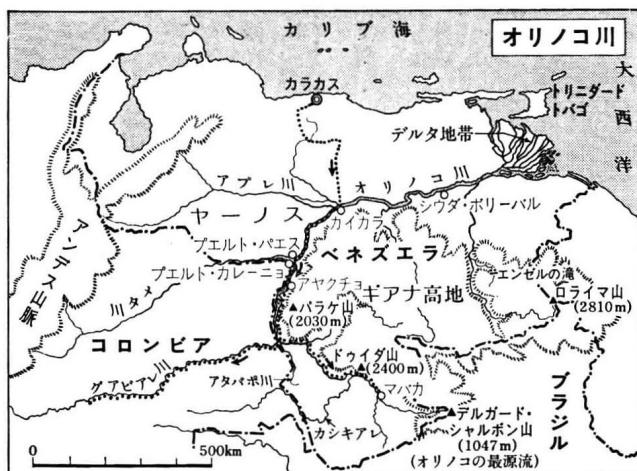
奥アマゾン横断の第一夜は、白い砂浜に船を着けて幕営した。南米三大河の一つ、オリノコ川¹の中流域である。このあたりで河口から八百キロほど上流だが、川幅は三キロから六キロ。川中のいたるところに緑のジャングルに覆われた大小の島（中州）があり、どこが本当の川岸かよく見当がつかない。そんな島の一つに見つけた、きれいな小さな砂浜である。

満天の星空だ。北天に低く、北斗七星がヒシャクを下にして立っている。南天にはやや右へ傾いた南十字星。頭上にはサソリ座が頭を右上にして中天に駆け上がっている。日本付近の空より星数は少ないが、豪華な構図の星空である。

ひとしきりみんなで南十字星を眺める。「あの下へ向かって行くのか」。誰かがぼつりと言った。茶化す者もない。みな同じ感慨なのだ。これから二年間、未知の大ジャングル地帯を、赤道を越えてひたすらその星の下へ向かって進んで行く。そのことへの不安、前途の重さを各人ひしひしと受け止めていたのだ。

一九七四年七月六日。二年がかり、ルート延長一万六千余キロに及ぶ「奥アマゾン横断」を開始した。ベネズエラのオリノコ河畔から、コロンビア、エクアドル、ペルー、ブラジル、ボリビ

I オリノコ川



アへと、南米六カ国にまたがるオリノコ川とアマゾン川の上中流域をカヌーと徒歩で一路南へと進んで行く計画である。

長旅なのでスケジュールを二期に分けた。この年は奥アマゾン横断の「前期隊」だ。オリノコ川をさかのぼり、コロンビア南東部のオリノコ・アマゾンの分水地帯を越え、アマゾンの大小支流を上り下りし、ジャングル横断を重ね、アマゾン本流にあるペルーのイキトス市まで七千余キロの行程である。この前期隊は横断本隊、支援隊、学術調査班合わせて総勢二十人のパーティーだ。二年目、一九七五年には「後期隊」が、イキトス市からアマゾン最長支流のウカヤリ川を遡行し、アマゾン原始インディオの「最後の聖域」の一つであるペルー南東部の秘境地帯を東へ横断して、ブラジル北西部からボリビア南東部へと九千余キロを南下する。

奥アマゾン横断計画の実現に踏み出したのは一九

七三年である。この年、六人の予備調査隊（第一次隊）が関係六カ国を回って下調べをし、さらにペルー南東部からボリビア北部へ流れるアマゾン大支流の一つ、マドレ・デ・ディオス川（^③聖母の川）千三百キロを下降して横断装備類の実験をした。

一九七四年初めから竹下孝哉（輸送担当）、川上伸生（熱帯農業調査）、海老沼晴夫（陸上踏査担当）の三人がペルーとコロンビアで横断ルートの偵察を始めた。四月に、私は家族ぐるみペルーの首都リマに移り住んだ。計画通り二年で成功するかどうか、ともかく腰を据えて奥アマゾン横断に取り組むためである。リマは奥アマゾン全域を見渡せる扇の要の位置にある。私の家を探検隊の現地本部とした。

六月末、二十人中十七人がリマ経由でベネズエラの首都カラカスに集結した。カラカスはカリブ海からせり上がった海岸山脈の上の盆地にある。標高約千メートル。人口二百二十万。高層ビルが林立する大都会だ。石油の国の首都なので、ショーウインドーに並ぶ商品や通りを走る車も他のアンデス諸国とは段違いに立派である。

市内のペンションを借り切って一週間、船送りしていた装備、食糧などの整理、梱包、足りないものの買い付け、奥地調査の許可取得などに奔走した。カラカス在住の正木春彦さん、川崎製鉄駐在員の小山利久さん、日本大使館の橋本貞夫さんらに親身に面倒をみていただいた。

七月四日、トラックと乗用車でカラカスを出発、熱気に燃え上がるようなヤーノス平原を突っ走って、四百キロ南のオリノコ河畔へ向かった。ヤーノスはアンデス山脈とオリノコ川との間、

ベネズエラからコロンビアへかけ、長さ一千キロ、幅三百数十キロにわたって広がっている湿潤性サバンナである。一望白っぽい灌木と、暑さに焦げついたような弱々しい草の原だ。ときおり農場があり、農場の入り口にはたいいてい、赤い花がいったいの大木や、大きな傘を差し掛けたように枝を広げた大木が立っていて、濃い緑陰で若い女がギターをひいていたりした。午後一時、木陰で摂氏三八度。温度計を太陽の下に出すと、水銀柱がすーっと上限の五五度に上がった。車の窓を開けても閉めても熱気で苦しい。

道の後半は緩やかな起伏の斜面の、一直線の下り。左右は有刺鉄線で囲った牧場だ。牛を四十頭ほども積んだ大きなトレーラーがすれ違った。無人の風車の井戸が牛用の池に水を汲み上げていた。オリノコ川は底から盛り上がるような力強い濁流が渦巻き、三角波が立っていた。道の終点の船着き場から乗合ランチで奥アマゾン横断の出発点と定めていた対岸のカイカラの町へ渡る。川幅六キロ。川の中ほどへかかると兩岸は霞み、上手と下手は水平線しか見えない。湖か海を渡る感じである。カイカラはヤーノスの畜産物の集散地だという。人口約七千。警察署長が「日本人はここへは初めてだ」と言った。隊員たちに子供たちが群がってついて回り、ホテルの前を娘たちがキヤーキヤーとこちらの気を引きながら通る。

こんなところにも日本商品はちゃんと出回っていた。アマゾンの蚊対策には現地の蚊帳をという方針だったので、隊員たちが町の衣料品店をしらみつぶしに当たったが、「メイド・イン・ジャパン」と「メイド・イン・ホンコン」の蚊帳ばかりである。

だが日本製の蚊帳は目が粗くてここでは評判が悪かった。アマゾン・オリノコの蚊や昆虫にはびっしり目の詰まった蚊帳しか通用しないのだ。ここには「ジャンボ」と呼ばれるでっかい蚊もいる一方、ほこりのように小さい蚊やブヨもいる。

七月六日正午すぎ、荷物運搬用にチャーターした屋根・船外機付きの大型カヌーと日本から持ち込んだ二隻のゴムボート（船外機付き）に分乗、カイカラの船着き場から奥アマゾン横断にスタートした。隊員十二人とカヌーの船頭、助手、ギア（案内人）の、計十五人のパーティーである。

探検隊派遣本部長の吉沢一郎さん（七一）と、行く手のコロンビアに空路先回りしてコロンビア以後の準備に当たる残りの隊員たち、それに町中が集まったのかと思われるほど多数の町民たちが手を振って見送ってくれた。吉沢老人は元日本山岳会副会長。霧雨続きで寒いリマから、富士山頂より高いボリビアの首都ラパスへ、熱帯のカラカスへと、気候がくるくる変わる中を挨拶回りに飛び回った。そして私たちの心配をよそにこの炎暑の地まで出発を激励しにやって来た。出発直前のミーティングで吉沢さんは目をしばたきながら「くれぐれも命を大事にな。喧嘩をするなよ、喧嘩したら私との縁を切るぞ」と、隊員たちに念を押した。

私は「自分の責任さえちゃんと果たすならあとは何をやろうと自由だ。だがけじめを忘れるな」と言った。「行動にけじめを忘れた者は遠慮なくアマゾン隊から放り出す」

僻地の探検では一人の行動や、ものの考え方にけじめがなくなると、しばしばそれが隊全体に